
あまがみ 1つの恋の物語

黒亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あまがみ 1つの恋の物語

【Nコード】

N3652BA

【作者名】

黒亜

【あらすじ】

意地っ張りです直になれない少年。

そんな少年のある冬の物語。

恋を知らない少年は運命に巻き込まれていく。

その結末は…

基本、自己満足の小説です。

楽しめる方だけ読んでください。

はつがみ 「オープニングです」(前書き)

がっつり恋愛方面の話。

主人公は特にチートとかでもなく、ハーレムでもないです。

新作の片方ですね。

もう1つ全く逆の作品も後日。

はつがみ 「オープニングです」

本当は気づいていた。

この気持ちは何なのかってことくらい。

いくら否定しても、隠そうとしても。

その笑顔に早まる鼓動は嘘をつけない。

君が笑った、嬉しい。

君が怒った、寂しい。

君が泣いた、悲しい。

一緒にいる時間は楽しくて。

一緒にいればいるほど、また自覚する。

どんなに意地を張ったって、君への気持ちは大きくなる。

それなのに言葉に出来ない。

こんなにも思っているのに自分は臆病者だ。

今から始まる。

甘く切ない1つの恋の物語。

はつがみ 「オープニングです」(後書き)

ありがとうございました。

短いですがプロローグなんです。

書き終わって思ったのは…「ねあらすじじゃね？」

1かみ 「クラスメイトです」(前書き)

ゆるーい感じの作品開始。

特に盛り上がりもないとは思いますが、

だらだら作品をだらだら見て頂ければと思います。

1かみ 「クラスメイトです」

俺の名前は水島勇樹^{みずしまゆうき}。

ここ輝日東高校に通う二年生だ。

現在は今日の全ての授業が終わり、放課後となっている。

ぱらぱらと帰っている者も見受けられるが、残っている大半はさっき返ってきたテストの結果について話でもしてるのだろう。

かくいう、俺も…。

「水島ー、テストどうだったよ。」

「92点だな。」

今、話しかけてきたのは梅原正吉。
同じ2 - Aに所属する友達の1人だ。

「相変わらず高いなー、おい。」

「まあ、俺にしてみれば当然当然。頭の出来が違うんだよ。」

「いつもながら言ってくれるなー。まあ、負けてるからなんも反論できねーけど。」

「梅原の点数は大体予想つくしな。」

「おおっと…これまたズバツと言っねえ。」

「橘はどうだった？」

「僕は平均点より少し上くらいだよ。」

俺が話しかけた梅原の隣の人物。

こいつは橘純一。

同じく友達の1人であり、梅原とは小学校からの仲らしい。

「ぐあ、大将にも負けちゃった。」

「お前は今自分で平均点以下ということ暴露したな。」

「!?! し、しまった…。」

「梅原、約束通り僕にお宝本1冊くれよ。」

「まーた、お前らは点数勝負でそんなもんの賭けをしてたのか。」

橘が言うお宝本とは、水着の女性だったり、コスプレしてる女性だったりがつているアッチ系の雑誌のことを指している。

一般的なものから結構マニアックなものまでこいつらの守備範囲は広い。

俺も見せてもらったことがあるが、数冊はなかなかのものだった。

最初の頃は俺もこのしょうもない賭けに参加していたのだが、毎回俺が勝利を収めてお宝本を獲得している、いつからか俺は勝負禁止になった。

“お前と勝負すると、俺の大切な娘たちが必ず連れてかれるんだよ！”と涙目で言われれば、流石に俺も二の句が継げない。

「いいだろ。なんだ、さては彼女でもできたからもう卒業ってか。」

「馬鹿言え。彼女いたら、こんな悲しく男同士でつるんでねーって。」

「うお、ひっで。」

「それ以前に俺は高校で彼女できるなんて思ってねえって。世界は広いんだ、こんな狭い学び舎から選ばなくてもなあ。」

「ほんと水島は理想高いからな。碌に恋もしたことないんだろ？高校生男子として、病気じゃないかと疑うよ。」

「いや、本気の恋つてのがまだ分らんだだけだ。普通に女の子を可愛いとかは思うって。断じてアブノーマルなわけじゃない。」

自分で言うのもなんだが、俺は勉強・運動は出来るほうだ。ただ、顔が特別格好よかったりするわけではないので、彼女はいな

い。
いや、彼女が出来ないのは俺自身が積極的でないことの方が原因か。そのうえ、俺は周りから見ると理想が高いらしい。よりランクが高い人をほしがるのは普通だと思うのだが。

「でもよ、この学校は正直レベル高いんじゃないか？」

「他の学校を見たことないからな。」

「森島先輩とか水島の理想に十分匹敵するだろ。」

「全校通して人気あるんだっけか。」

「そうそう、まさにこの学校のアイドルだよな。」

今、話題にあがっているのは森島はるかという名前の先輩だ。人気者と呼ぶにふさわしい人であり、特に男子生徒からは絶大な支持がある。確かに見た目は相当美人なんだよな。

「どうよ、森島先輩とかは。」

「確かにめちゃくちゃ綺麗ではあるけどさ…、俺たちと全く関わらないだろ。」

「まあ、高嶺の花だよな。そういえば、この前も他のクラスの奴が連続で告白して、撃沈したんだ」

ってよ。手の届かない存在ってああいう人のこと言うのかねえ。」

「それに三年生は受験だろ。俺らなんかにつき合ってくれないって。」

「僕もそれは思うよ。」

「二人して夢がないねえ。ま、流石に相手が相手か。」

いくら理想にかなっているからといって、そんな可能性はほとんどないだろう。

全校生徒の憧れに手を出しても、他のチャレンジャーと同じ道を辿るのは目に見えている。

「でも、もうすぐクリスマス。彼女の一人くらいいいないと寂しいことになるぜ。」

「…そうか。」

もうそんな時期か。

確かに一人孤独にクリスマスってのはかっこ悪いな。

けど、無理に告白してふられるのはもっとダメ。

結局、今年も何も無いんだろうな。

ま、平和が一番だよな。

「じゃ、俺は行くから。」

「お、今日も部活か。精が出るねえ。」

「梅原も剣道部所属だろうが。幽霊部員やってないで、ちゃんと行けよ。」

「ははは、こりゃ一本取られたぜ。」

「梅原は例の愛しの先輩が受験でご無沙汰だからだろ。」

「おいおい…、大将まできついな。」

「なら、ちょっとは否定してみたらどうだ？」

「…返す言葉もございません。」

「そういうことで、今度こそじゃあな。」

「ああ、部活がんばれよ。」

俺はがっくりする梅原を置いて、教室を後にした。さてと、今日も部活に励みますか。

1かみ 「クラスメートです」(後書き)

ありがとうございました。

書いていて思ったのは前作より

会話が多目になっていますね。

主人公の人物像はちょこちょこ書いていきます。

2かみ 「部活です」(前書き)

前の話は改行がおかしかったので、

基本1行40字にしてみました。

不具合があったらもっと減らします。

2かみ 「部活です」

俺は水着に着替えて、プールに入っていた。

そう、俺が所属しているのは水泳部。

ジャージで走りこむ外回りの日もあるが、今日は普通に泳ぎの練習だ。

とりあえず、200メートルを泳ぎきってプールサイドへとあがる。部活が始まってから結構時間も経った。

外から差し込む夕日が水面に反射している。

そろそろ終了の時間だろう。

そんなことを思いながら、プールを眺めていると他の水泳部員があがってきた。

キャップを外すとサラリと流れるショート黒髪。

俺とは違う形の水着を見るまでもなく、細い腕に白い肌は女子のそれだった。

同じ部だし何度か見たことはあるが、話す機会なんてほとんどない。確か名前は“七咲逢”、1年生で結構活躍している女子のはずだ。ここまで気にして見るのは初めてか、どうしてだろうな。

そっぴや、梅原の奴がなんか言ってたな。

“もうすぐクリスマス。彼女の1人くらいいないと寂しいことになるぜ。”

教室での言葉が思い出される。

はあ、また突然なことを言い出すよな。

そう焦って探すもんでもないだろうに。

けど、俺もいつか好きになる奴と出会っのかねえ。

不意に目が合った。

そのままこちらを見つめている。

いや、見つめているというより俺を睨んでる？

「すみません、ちょっと…」

近づいてきて声をかけられる。

とても透明感のある澄んだ声だった。

「なんなんですか、さっきからジロジロ見て。」

だが、紡がれた言葉は声質に即したものではなかった。

明らかに機嫌が良いとは思えない表情。

どうやら視線を向けたまま色々考えてたのが悪かったらしい。かなり軽蔑の視線を受けているのは気のせいじゃないだろう。つたく、梅原が変なこと言うせいだ。

「何とか言ったらどうですか。」

「別に見てねーよ。」

「いやらしい目でさっきまで見てたくせに白々しいですね。」

「は？そつちが後からあがってきたんだろ。同じ空間の中にいりや目に入ることくらいはあるだろ。」

「どうですかね。こういふことするために部活に入ったんじゃないですか？」

なんだそりゃ。

どうしてここまで言われなきゃならないんだ。

確かに梅原に言われたことを思い出してたから、若干意識して目は向けてしまっていたか

もしれないが、断じていやらしい思いなんてない。

それなのに、あまりにも酷い言い草じゃないか？

「ちょっと自信過剰じゃねえのか？」

「別に。ただ男の人なんてそういうことしか考えられないんじゃないかないですか？」

流石にこれは力チンときた。

思い切り言っつてやらないと気がすまねえ。

怒りに任せて口を開く。

「馬鹿じゃねえのか、お前みたいな年下になんて興味ねえんだよ。」

「なっ……」

「森島先輩くらいじゃなけりゃ俺が見とれるレベルにはいかねえよ。」

咄嗟に勢いで森島先輩の名が出てしまった。
今日話題にあがっていたからである。

「先輩が森島先輩とつり合うようには思えませんが。」

「はあ？どういことだよ、そりゃ。」

本当にこの後輩はいちいち俺のム力つくポイントを刺激してくる。
そこまでなめられると、こちらも引き下がるわけにはいかない。

「なら先輩は付き合える可能性があるとしても？」

「0ではないだろーが。」

「それは少し苦しいんじゃないですか。」

「なら、やってやるよ。そんなに疑うなら証明してやる。」

「え？何を……」

「俺が仲良くなって、そこまで漕ぎ着けりゃ文句はないよな。」

もうある意味ムキになっていた。

確実にこいつは俺を馬鹿にして見下している。

それを考えると、頭で処理をする前にどんだん言葉が出ていった。

「ただ俺がもし成功したら、さっきの可能性がないとかいうふざけた発言は取り消しても
らうからな。」

「それは取り消しますけど…本気ですか？」

「絶対に後悔させてやる。」

.....

で、下校の道中。

「なんであんなこと言ったんだろ…」

猛烈に後悔していたのは俺だった。

何故あんな変なところで意地を張ってしまったのか。

自分の性格のせいどころいったことになるのは初めてではないが、
流石に今回はレベルが

違う。

こんな大切なことを勢いでするべきじゃないだろう。

というかリスクが高すぎる。

相手はあの学園のアイドル森島先輩。

成功する可能性なんて万に一つもないだろうが。

あの七咲のほづがよっぼど正しい意見を言ってるわ。

自分のプライドを守るために言ってしまったが、結局これで振られ
でもしたほうがプライ

ドを傷つけることにつながるだろう。

はあ、胃が痛い。

とにかく明日何か行動をしよう。

付き合わずとも仲良くなれば、少しは相手に分からせることが出来
るかもしれない。

人気が人気だけに仲の良い友達というだけでも相当凄いことだ。

よし、なんとかやってやる。

2かみ 「部活です」(後書き)

ありがとうございました。

もうヒロイン分かりましたかね。

というか、全体として短い話になるかもですね。
すぐ終わりそうです。

3かみ 「バカです」(前書き)

2作品を並行してやると、

たまに名前を間違えるんですよ。

そんな危険もありつつ、3話です。

3かみ 「バカです」

先輩と仲良くなるためにどうすればいいのか。

そんなことを昨日一晩考えたが、案の定何も思い浮かばなかった。まず接点がないもんな…。

うーん、どうしたもんか。

ドンッ

「きゃあっ!」

「うわ!」

考え事をしながら歩いていたら、まわりに意識がいていなかった。

どうやら反対から歩いてきた人とぶつかってしまったらしい。

咄嗟に支えはしたが、相手は尻餅をついていた。

「あいたた!」

「すみません、大丈夫ですか。よそ見してて。」

「うん、平気平気。私もちょっとぼーっとしてたから。」

「立てますか?」

「ありがとう。」

とりあえず、手をとって起こそうとする。
だが、そこで気づいた。

「え、森島先輩!？」

「へ、私のこと知ってるの?どっかで会ったことあったっけ?」

「いえ、一方的にこっちが知ってるだけで…」

「そっかそっか、それなら良かった。」

思わぬところで森島先輩に出くわした。

本当ならチャンスなんだろうが、生憎こっちは何の準備もないぞ。
とにかくこれをどうにか次につなげなくては…。

とりあえず、会話を試みよう!

「森島先輩、ぼーっとしてたっけって言っていましたけど、どうかしたんですか?」

「んーとね、可愛い動物のこととか考えてたら夢中になっちゃって。」

「可愛い動物ですか。」

「そうよ、昨日もね新しいダックくんキーホルダー買ったし。」

「ダックくんって、あのダックスフンドの可愛いキャラクターですよ
ね。」

「わお！知ってるの？」

「友達の妹が結構教えてくれたんで、割とよく知ってます。」

「ベリーゲーよ。こんなところでダックくん仲間を発見できるなんて。」

「あ、ありがとうございます。」

なんか上手いこと話が進んでないか。
友達にどうにかこのまま持っていけるか？

「キミ、お名前は？」

「あ、水島勇樹っていいです。」

「え？キミがあの水島くん？」

「“あの”ってどういことですか？」

「水島勇樹くん、そっかーキミがそうなんだ。ひびきちゃんからい
つとも聞いているの。水」

島くんっていう可愛い後輩が部活にいるって。」

「はあ、塚原先輩にですか。」

「そうよ、ふふっ。ひびきちゃんってば、毎回キミのこと褒めてるんだから。誰よりも…」

あ、これは言っちゃいけないんだっけ。」

大体言おうとしたことは予想がつく。

塚原先輩のことだから気を遣ってくれているのだろう。

色々と俺の場合、お世話になっているしな。

「じゃあ、これからもよろしくね。水島くん。」

「あ、はい。よろしくお願いします。」

「ダツくん好きってことは二人の秘密だからね。ひびきちゃんとかに言っちゃダメよ。」

「分かりました。」

「じゃーね、バイバーイ」

行ってしまった…

だが、これは最初の出会いとしては正解なんじゃないか？
少なくとも友達くらいにはなれそうな気はした。

というか、もう友達だと思ってもいいのだろうか。

んー、難しい。

とにかく、あんなに大言してしまったわけだし、どうにか結果を残さないとな。

それじゃないといつまで経っても後輩の七咲にバカにされたままだ。そんなのは俺のプライドが許さない。

付き合ってたのはとりあえずおいといてだ…。

親密な関係にくらいはなれるように頑張ろう。

.....

「つーわけでだ、今日だけでここまで進展したからな。」

「はあ、わざわざそれを言いに来たんですか。」

部活の時間。

少しは見返してやろうと、七咲に今日のことを話したのだが…

「正直、森島先輩がいい人だっただけじゃないですか、それ。」

「くっ…けど…」

「付き合えるって言ったんですから、もっと質の高い報告にしてください。」

見返すどころかさらに見下された。
くそ、ほんとに生意気な後輩だな。
ぜってー認めさせてやる。

.....

Side 七咲

部活が終わる。

いつものように着替えに行こうとすると、塚原先輩が声をかけてきた。

「七咲、水島くんなんか喧嘩でもしてるの？」

たぶん、言い合いを見られていたんだろう。
別に隠すことでもない。

けど、説明するのも馬鹿らしかった。

「喧嘩じゃないです、ただあっちがムキになってるだけで。」

「七咲って水島くんに敵しいわよね。」

「私、あの人が嫌いですから。確かに泳ぎは上手いですけど、それで

偉そうにして自分は才

能があるからとか言って…頑張ってる人に失礼です。」

「…やっぱりそう見えちゃうわよね。あんまり言わないほうがいいんだろっけど…」

「？」

「七咲、この後時間ある？」

そう言っつて連れてこられたのは、さっき練習が終わったばかりのプール。

「ここから出ないでね。見て。」

「え、あ…」

先輩に促されて見た先には一緒にあがったはずの水島先輩の姿があった。

その顔は真剣で練習中の余裕ぶつた表情からは想像できない。

「あの子ね、いつつも終わってから練習してるの。自分は努力しないと何も出来ないから

使わせてくれて私に頼んできてね。使えるギリギリの時間まであやっつて毎日泳いでる

のよ。」

信じられなかった。
いつも自分はレベルが違うからと、練習を馬鹿にしていたように見えた先輩が一番こんな
に努力していたんだ。

「彼成績もいいけど、それだってテスト前は私に聞いてくるくらい熱心なのよ。本当に頑張ってる子なのよ。なんで彼がこの部に入ったか知ってる？」

私は塚原先輩の話に耳を傾けてることしか出来なかった。

「カナヅチを克服したいからだったの。自分が苦手とすることで馬鹿にされたくないから
つて。」

「…ほんとにバカですね。」

私は呆れて、しばらくその練習に打ち込む姿を見ていた。

S i d e o u t

3かみ 「バカです」(後書き)

ありがとうございました。

話によって長さまちまちになると思いますが、
出来たら投稿方式ではそこまで関係ないですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3652ba/>

あまがみ 1つの恋の物語

2012年1月14日10時46分発行